

【早蕨】 さわらび

『万葉集』 卷第八 春雑歌

・ 志貴皇子權御歌一首

石激 垂水之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨 (1418)

・ 志貴皇子のよろこびの御歌一首

・ 石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

[岩より落ちる滝のほとりに早蕨が芽を出す春になったのだなあ]

『万葉集』 四千五百十六首の内、最も好きな歌はどれでしょうかと尋ねられたとき、この歌が脳裏に浮かぶ人は少なからずいることでしょう。

春到来の喜びが素直に伝わり共感できる歌ですね。

「さわらび」の「さ」は接頭語です。特定の意味を持たない品詞ですが、韻文の名詞・動詞・形容詞に付け奥深い趣をかもし出し、語調を整える効果があります。

「わらび」という言葉は古歌や『正倉院文書』などに散見できますが「さわらび」という言葉はこの歌が初見です。

従ってこの歌の「さわらび」は定型的な歌語ではないようです。

後世「左和良妣[サワラビ]」に「早蕨」の字を当て「芽を出したばかりの」「早春の」という意味を匂わせたのは名訳といえましょう。

「石ばしる垂水」という言葉も春らしい雰囲気を美味しく掴んでいます。上代では滝が急流を意味するのに対し、垂水は高いところから垂直的に落ちる流水、すなわち口語の滝を意味しました。この使い分けは時代を経て次第になくなり滝が両者を総称するようになったのです。

春は雪解けのため滝(垂水)の水量が最も豊富な季節です。激しい水しぶきは凍れる冬の世界からの解放を表しています。

また、四句からの「萌え出づる春になりけるかも」と一気に詠み上げる歌の調べは感嘆の情を乗せて、この歌をさらに生き生きとさせているように思います。「～になりけるかも」もこの歌が初見で、以降『万葉集』には数首見られます。

この歌の背景に志貴皇子の封戸の増加・昇進などが暗示されているといった解釈もあるようです。検討する価値は大いにありますが、仮にこの歌を詠んだ心の張りが喜ばしい封戸の増加・昇進が契機であったとしても、歌の内容には積極的に身の上を比喻しようとした意図は感じられません。この歌の定型的でない歌語は何らかの比喻というより写生であり、春の到来の喜びを率直に詠みきった歌と解釈するのが自然ではないでしょうか。

志貴皇子[しきのみこ](?-716)は天智天皇の第七皇子。壬申の乱に敗れた天智系の皇子であるため皇位とは縁なく生涯を終えました。

それでも、天武天皇の娘の託基皇女を正妃とし、母系では天武系となる皇子を儲けました。さらに紀椽姫との間の第六皇子白壁王が光仁天皇として即位したことから、それほど不遇な立場ではなかったように思われます。

彼の歌は『万葉集』に六首あります。時代順に並べてみましょう。

- ・采女の袖ふきかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く 695 年
- ・葦辺ゆく鴨の羽交に霜降りて寒き夕へは大和し思ほゆ 706 年
- ・むささびは木末求むとあしひきの山の獵師に逢ひにけるかも 717 年
- ・大原のこのいち柴のいつしかと我が思ふ妹に今夜逢へるかも //
- ・石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも //
- ・神なびの石瀬の杜のほととぎす毛無の岡にいつか来鳴かむ //

(年代は土屋文明編『萬葉集年表第二版』による)

いずれも素朴な味わいの歌ですね。「袖ふきかへす」「羽交に霜降り」など写生的表現に妙があります。

このほか「早蕨」は『源氏物語』巻四八の巻名であり、襲(かさね)の色目の名にもあります。これらについても触れたいのですがまたの機会にしましょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~